

キリマンジャロ登頂

金山 広美 (登山家)

2003年8月にキリマンジャロ(5,895m)の山頂を踏むチャンスが訪れた。

30歳半ばで完全に光を失い、全盲になってから始めた登山は12年目の夏を迎えていた。目の見えない者がどのようなサポートを受けながら登山するかは後述することとし、私たちのキリマンジャロ登山記録を記す。

8月9日、登山仲間である菊地夫妻と私の3人は、台風の影響で2時間遅れの22時55分に羽田空港を出発する飛行機に乗った。関空・ドバイ・ナイロビを經由して翌日の午後にタンザニアのダルエスサラーム空港に着く。国内線に乗り換えてアルーシャまで飛び、キリマンジャロ国立公園の近くのロッジまで行く予定であった。ところが、アルーシャへの飛行機は欠航になってしまい、急遽、10数人乗りのチャーター機でキリマンジャロ空港に飛んだ。19時にロッジに到着。

8月11日、ロッジを8時30分に出発し、2時間ほど車に揺られ1,970mの登山口に着く。ここで



写真1 サポートの様子。通常は前後一列で歩くが、幅の広い道では横を歩いたりする。



写真2 サポートの様子、前から。

登山手続きを行い、登山口で待っていたガイドのエディーとサポート方法の打ち合わせを行った後、エディーのザックに取り付けたサポートロープに捕まって小雨に煙るジャングルの中を歩き始めた。(写真1, 2)

マンダラハット(2,700m)までの登山道は、道幅もわりと広く平坦であったので、体力的には何



写真3 溝をまたぐ。菊地夫人が足元の様子を金山に伝える。

の問題もなかったが、20m置きくらいに登山道に掘られた水抜き用の溝をまたいで歩くのに閉口させられた。登山道に横たわる溝は、靴幅くらいなので目が見えていれば何の障害にもならない。ガイドのエディーは、溝に近づくと「ダウン」と言う声を出して教えてはくれるが、彼の声と私が溝をまたごうとするタイミングがなかなか合わない。不自然な形で溝の中に足が取られる。時差ぼけが残った頭の中では、感覚神経が鋭敏に働いてくれないようだ。(写真3)

マンダラハットには15時5分に着く。ここまでの登山道は2,400m付近に少し登りがあるが後は殆ど平らに感じられた。

8月12日、8時35分にハットを出た。今日の行動はホロンボハット(3,720m)までの標高差1,000mの登りである。マンダラハットを出発して30分くらい歩くと、樹林の間からキリマンジャロの頂が見え始めてくる。人差し指の先で山の稜線を描いてもらい、キリマンジャロの大きさや形を確認する。樹林帯は徐々に低木と草原地帯に変わって行く。登山道の周囲を囲んでいる木々と共に、身体にまとわりついていた空気が遠くに流れて行き、圧迫感から解放されるので平原に変わって行くの

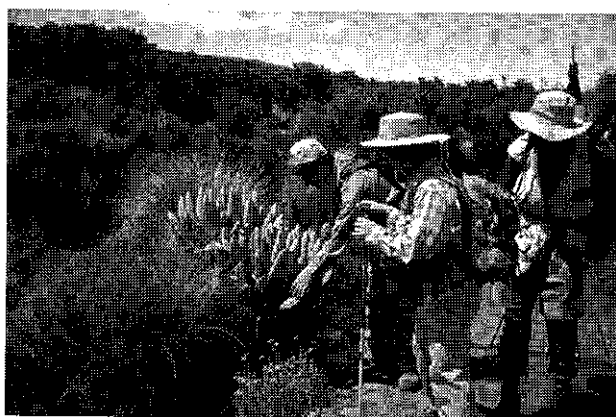


写真4 珍しい植物を説明する菊地夫人、触ることが出来るものは触って形を想像する。

が分かる。晴天にも恵まれた最高の登山日和である。ガイドのエディーとの歩行のタイミングも徐々に合い始め、アフリカの草原の空気を身体で感じながら歩く余裕も出てきた。(写真4)

行動時間6時間というのんびりしたペースで歩き、14時40分にホロンボハットに着いた。

8月13日、今日の出発は8時50分。4,703mのキボハットまでの900mの登り。登山道には小さな石もごろついているが、石の上に足を下ろしても平らな場所に踏み替え直してからエディーを立ち止まらせることなくついて行く余裕は十分にある。私は、一昨年の夏にモン・ブラン(4,810m)を体験しているのでキボハットまでは高山病の心配はないだろう。7月に2回、富士山で高度順応の訓練はしているが、菊地夫妻にとってこれから先の高度は未知の世界である。

菊地夫人は、英国から来たという人たちと話をしながら元気に歩いている。菊地氏は、持参した一眼レフカメラのシャッターを何度となく押しているようだ。登山道の幅も広くゆったりとした登りである。高山病の心配はしなくても大丈夫だろうと思えた。

14時30分に山小屋に到着すると、愛媛大の学生が4人、青年海外協力隊の男女が3人、単独の男性が1人。それに私たち3人を含めて日本人が同じ部屋に泊まることになった。明日山頂アタックをする日本人はこの部屋に泊まっている人だけのようである。

8月14日、我々は0時15分に小屋を出た。ヘッドランプの灯りが山頂を目指して続いて行く。ウフルピーク(5,895m)までの登りは約1,200m。下りは、ホロンボハットまで下山するので約2,200mが今日の標高差である。私もこれからの高度は初めての体験になる。

4. 海外登山記録

単独の男性は高山病のためにキボハットから上には登らなかった。5,000m付近で、菊地夫人が体調不良のため登頂を断念し、下山した。愛媛大のメンバーにも体調不良で登山道脇に座り込んでいる人がある。「自分は大丈夫なんだろうか」という思いが過ぎたが、その言葉を頭の中から追いついて、全身に感じるキリマンジャロの霊気と、前を歩くガイドの靴音に精神を集中させる。

これから先は、ガイドのエディー、アシスタントのレギイ、菊地氏、それに私の4人で登ることになる。今までは、菊地夫人がガイドとの通訳をやってくれていたのですが、これから上はこれまでの単調な登りとは違って来るだろうから不安がないでもなかった。私の場合、身振り手振りで意志の交流を図るというわけにはいかない。菊地氏か私のどちらかが、高山病の影響を受ければ二人の歩行速度は違ってくる。離れて歩くことになるかもしれない。英語が話せず、目も見えない私が、エディーと二人きりになったとしたら、どうやってコミュニケーションを取ればいいのか。二人とも高山病にとりつかれないことを祈るのみである。

左手に持ったエディのザックの動きと、右手に握ったストックに感じる地面の様子とを重ね合わせて、登山道の状態を予想しながら一歩ずつ足を運んで行った。ギルマンズポイント(5,685m)到着は、ちょうどご来光時と重なった。地平線から顔を出してきた太陽の光が頬に当たり、そのぬくもりの中に私のまぶたにもご来光が見えてくるようだ。

30分ほど休んで山頂のウフルピークに向かおうとした。この先は、富士山のおはち巡りのように火口壁を回って5,895mの最高地点まで登ること

になる。ガイドのエディーは、山頂までの登山道の途中にある火口に切れ落ちた狭い部分の通過を心配しているようだ。全盲であり、なおかつ話を通じない日本人をサポートしながら狭い登山道を歩くことも不安だったのかもしれない。ギルマンズポイントまで登ればキリマンジャロ登頂の証明書は出してもらえるのだ。

ウフルピークまでは標高差約200m。キリマンジャロに登ったことのある私の山仲間の1人は、ゆっくり歩いても2時間くらいだろうと言っていた。特に危険な場所はないが、高山病との戦いだろうとも話していた。私の体調は、普段の登山とそんなに変わらなかったのも山頂を目指したかった。そんな私の思いがエディーに伝わった。私たち2人をウフルピークに立たせたいという気持ちもあったに違いない。

エディーが心配していた火口に切れ落ちた部分は、ここまでの登山道と比べれば確かに狭くなっていたが、日本で歩いている山道と対比すればなんの不安もない道であった。しかし、高度の影響は徐々に現れてきた。頭痛はなかったが、息切れのために歩行のペースが遅くなっていった。我々はゆっくりゆっくり歩いた。そしてついに8時30分、アフリカ大陸の最高峰に立ち記念写真を撮ることができた。(写真5)



写真5 キリマンジャロ頂上にて。

登りの体調は悪くならなかったが、下りはそうはいかなかった。ギルマンズポイント直下から始まる富士山の砂走りのような場所を、蛇行せずに真っ直ぐに下降した。最初はとても快適だったが、下降途中で私の脚が音を上げてしまった。少し平坦な場所まで下りてから、小さな石に足が乗った後に体制を保持しようとして石の上の足を踏み換えると、息が上がってしまいしばらく休まないと歩けないのである。登山道に真っ平らな道などありえない。わずかな段差や小さな石につまずいても、ゼーゼーと呼吸があらくなり一端足を止めて休まないと次の足が出ないのである。膝が笑うというわけではない。普段なんでもなく行えているはずの不安定な場所に足を下ろしてしまった時の踏み替えができない。

ギルマンズポイントからキボハットまで下るのに2時間もかかっていないというのにとっても長く感じられた。キボハットからの約1,000mの下りはもっと長かった。途中からエディーと二人きりになってしまったので、言葉が通じず周りの状況を把握できなかつたせいもあるだろう。「ホロンボハットまで歩き通せるだろうか」という不安が常につきまとっていた。キボハットから4時間近く歩き続けてホロンボハットにたどり着いたのが16時10分。行動時間が16時間というとても長い1日であった。

8月15日、7時15分にホロンボハットを出る。昨日のような息切れはない。初日に小雨が降っていたので立ち寄らなかったマウンジクレーター(2,800m)を回り、11時15分にマンダラハットに到着。そのまま歩き続け13時30分に登山口に下山。5日ぶりに飲むビールで登頂を祝して乾杯。

視力に障害を持つ者がどのようなサポートを受けて登山を行っているか簡単に述べてみよう。

基本的には晴眼者2名、視覚障害者1名の3人が1組になって歩く。前方を歩くサポーターのザックに紐を付けて後ろから捕まれるようにする。視障者はその紐を片手で握って歩くのである。前を歩くサポーターは、段差、倒木、頭上の枝等の障害物や、登山道の状況を説明しながら歩く。後ろを歩くサポーターも同じように視障者の足下を見ていて適宜必要な指示を与える。(写真6)

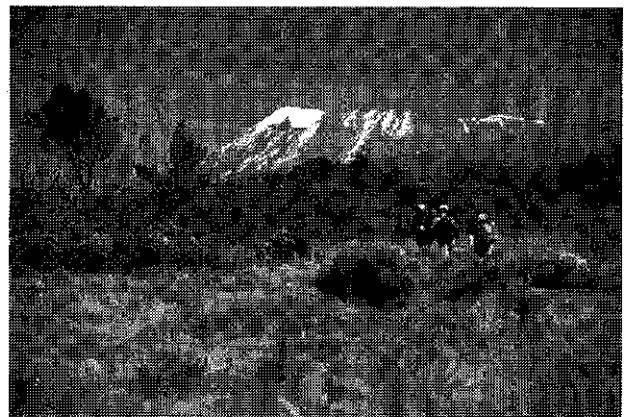


写真6 サポートの様子：先頭にガイド、金山，菊地夫人（サブガイドで隠れている）

慣れてくると、前を歩くサポーターのザックの動きによってある程度登山道の状態が解るようになる。ザックが垂直に上に動けばそれと同じ高さの段差があるはずだし、下に動けば同様な段差で下降しているはずである。ザックが左に向きを変えたとしたら登山道は右、右に向きを変えれば登山道は左に蛇行している。高さを変えずに前方に倒れながら進めば頭上に枝や立ち木等の障害物がある。前方に倒れるようにして下降するときはかなり大きな段差が予想される。普通に足が下ろせないで何かに捕まる為にかがんでいると思われる。このようにして捕まったザックの動きで登山道の状況を予想して歩いているのだが例外もある。

初日のマンダラハットへの登山道に横たわった水抜き用の溝がそうである。溝の幅が小さいので

4. 海外登山記録

ガイドのエディーは普通に歩ける。従って彼の背中のザックは平坦な道を歩くときと同じような動きしかしない。「ダウン」という声を出して教えてはくれるのだが、その声を聞いてから何歩歩いて飛び越えていいかが判断できない。しかし、20m置きに掘られた溝を、毎回立ち止まりながら指示していたとしたらどれくらいの時間を要するか分からない。これはサポートするエディーと息が合ってくるのを待つしかないだろう。実際に下りでは、溝に足を取られる回数は数十分の一に減っている。

今回のキリマンジャロ登山に当たって頭を悩ませたのが、私のサポートを誰にやらしてもらおうかということである。6000m近い高所でサポートをやりながら歩くという行為は、かなり大変な作業になると思われた。それ以上の高所を何度か経験し、高山病に絶対にかからないという人でないと無理だろう。普段一緒に山歩きをしている仲間にはいない。高所経験の多いプロガイドに同行してもらおうという方法もなくはないがこれは経済的に無理である。

そこで思いついたことは、現地のガイドにサポートしてもらうことである。何度もキリマンジャロに登っている現地のガイドであればサポートしながら歩いたとしても高山病の心配はないだろう。直接タンザニアのガイドとコンタクトが取れば、実現の可能性が出てくるかもしれないと考えた。今はインターネットの時代である。毎日のように音声ソフトを使って、パソコンの操作を行っているのでメールやインターネットは自由に使える。それを使えば探せるだろう。しかし、ホームページは探せても、英語で書かれたページを読んで交渉する能力は残念ながら私にはない。

でも、そんなことでは諦められなかった。外資

系の会社に勤めている人やキリマンジャロに登った経験のある人、あるいはアフリカの様子を知っているような人を尋ねたり、メールで問い合わせをしたりして可能性を探った。

そんな時、山仲間でもある友人の小林氏から、同僚で3年間タンザニアに滞在してチンパンジーの研究をしていた人がいるという話を聞いた。小林氏に紹介してもらい直ぐにメールを出した。その同僚はキリマンジャロ登山のことは知らないようだったが、知人を通していろいろと調べてくれた。何度かメールのやり取りをしているうちに、タンザニアでツアー会社をやっている根本氏を紹介してくれた。昔、青年海外協力隊の一員としてタンザニアに滞在していた根本氏は、現地に住み着いてツアー会社を始めたのだという。彼との出会いがキリマンジャロ登山の実現を後押ししてくれた。日本語を使ってキリマンジャロ登山の交渉をしたり、現地の様子を聞くことができるようになったのである。

全盲である私のキリマンジャロ登山の支援をするに当たって、初めは根本氏にも戸惑いがあっただろう。私は、これまでの登山歴を話したり、どのようなサポートを必要とするかを説明した。インターネットを使ったメールのやりとりは、日本とタンザニアの距離を縮めてくれただけではなかった。視覚障害者が使っている点字と晴眼者の使う通常の文字（墨字）とのコミュニケーションギャップを無くしてくれる。私がインターネットメールを使えなかったら今回のキリマンジャロ登山は成立していなかっただろう。

根本氏との意志疎通を図るのに何度かのメールのやり取りを必要としたが彼は理解してくれた。私をサポートしながら登ってくれるガイドを根本氏が探してくれることになった。日本語を話せる

現地ガイドがいれば理想的ではあるがそこまでは望めないとしても、日頃からサポートをしてくれる人のザックの動きで登山道の状況を把握しようと心がけているので、言葉が通じなくてもなんとか歩けるだろうと考えた。

サポートの問題は解決した。日本から同行してくれる人さえ捜せばキリマンジャロ登山は実現する。最初は2002年の暮れを目標に計画したがだめだった。イラク戦争、テロ騒動の心配もあり同行者が見つからなかった。

2003年に入ると、タンザニアの根本氏からメールが届いた。夏休みにキリマンジャロ登山を計画している大阪在住の人たちがいるので、まだ同行者が見つからないようならタンザニアまで一緒に来ないかという内容だった。その気があればそのグループに打診してくれるという話だ。どうしてもキリマンジャロの空気を自分自身の身体全体で感じてみたいという気持ちになっていたので、私は、同行してくれる人をなんとしても探そうと決めた。1度も面識のない人たちと数日間過ごすのはかなりの気疲れが予想されたからである。

私のように目の見えない者が、縦走のような長期の登山に挑戦するとき問題になることは、登山道を歩くときのサポートだけではない。初めての場所では、朝起きてから夜寝るまで、すべての行動において誰かの目を借りなくてはいけない。旅館やホテルに泊まるのではないので、夜中にトイレに行きたくなっても同行者を起こさなければ行かないのである。視覚障害者と初めて出会った人は、日常生活の世話をするだけでもかなりのストレスを感じるはずだ。ましてや、キリマンジャロのような高所登山では、自分のことで精一杯で、他人の面倒を見られるような余裕のある人は少ないだろう。

1度も面識のない人たちの中に混じって、キリマンジャロに挑戦していたとしたら、山小屋の連泊だけで、精神的に挫折していたかもしれない。今回、菊地夫妻が同行を承諾してくれたことは本当に幸運だった。

このような経緯で、8月19日、22時25分、我々3人は無事に羽田空港に到着した。